

阪神地区における男・女大学生の着装に関する衛生学的調査研究
 神戸大教育 稲垣和子

目的 衣服の適・不適はヒトの健康に大きな影響を及ぼすものである。快適な健康衣服を求めて従来より種々検討を行なっているが、そのためには着装実態を知るニヒが肝要である。今回は昨年報告の成人男子学生の着衣調査に引き続き、同時に男・女大学生の着衣傾向の実態調査を行ない、若干の成績を得たので報告する。

方法 阪神間に居住する男子学生150名、女子学生150名(年齢18~24才)について、1982年4月、7月、10月、1983年1月の計4回にわたり、追跡調査法により着衣状況を調査した。調査内容は年齢、体格、寒暑感、湿潤感、快適感、着衣重量、上半身及び下半身着衣衣服の内容、着用枚数と組み合わせ、素材、類被服、調査時の屋内・屋外の温熱条件などである。

結果 衣服重量は季節に応じて変動し、男女共夏<秋<春<冬の順に大となる。単位体表面積(m^2)当りの衣服重量は、女子を1とした場合男子は春1.31、夏1.16、秋1.27、冬0.94となり、冬季以外は男子の方が女子よりも大である。肩重量は男女共夏<春<秋<冬の順に大で、腰重量は季節変化による変動が小さいである。特に男子は夏季を除きほとんど差が認められず、衣服重量の季節変化は主として上半身着用衣服の重量の変動による。着用枚数においても上半身衣服の枚数に季節変化が大きくみられ、下半身衣服枚数は年間を通し変化が小さいである。着用感覚は屋内では夏季、屋外では夏・冬季を除きほぼ快適であり、夏季屋内の温熱条件についての考慮が必要であることが判明した。衣服の種類は複雑多岐にわたり、男子23種、女子26種であった。なお若年層における被服衛生の教育の必要性を痛感した。